

英語教育における英米文学

— 英語教員養成における文学の意義と可能性 —

鶴生川 恵美子¹⁾ 上原 景子²⁾

British and American Literature in English Education: Significance and Possibility of Literature in the Training of English Teachers

Emiko Ubukawa Keiko Uehara

Abstract

This paper discusses the significance and possibility of English literature for English education. English-Language Literature is one of the five required content subjects in the English Teacher Training Curriculum specified by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology. Reading literary works may enable English learners to see a variety of people's lives, thoughts, cultures, and society, which they are unable to experience directly. However, literary works have not yet been appreciated sufficiently as teaching materials in English education. For this reason, we use Mark Twain's *Adventures of Huckleberry Finn* (1884), one of the major American literary works, as an example to consider the significance and possibility of English literature in English education. Through reading major literary works written in English, Japanese learners may be able to acquire various English expressions and understand different cultures and society and diversity of people. Thus, for not only learners but teacher trainees, English literature may serve as a gateway to the accumulation of knowledge of the world and advancement of English ability for the development of their communication ability using English.

key words: English teacher training, core curriculum, English education, British and American literature

キーワード: 英語教員養成, コア・カリキュラム, 英語教育, 英米文学

I はじめに

文部科学省は、中・高等学校教員養成課程の外国語（英語）のコア・カリキュラムの英語科に関する専門的事項の一つとして、「英語文学」を位置付けている。このことから、本論は英語教員が英米文学および英語圏の文学を学びそれらの知識を持っていることがいかに重要であるかを、英語

教育における文学の可能性に着目して考察する。そのため、以下の四つを行う。第一に、英語教育の歴史を振り返り、英語教育における文学作品の教材としての活用の変遷をたどり、そのうえで、英米文学を含む英語圏の文学作品が教材として活用される意義について述べる。第二に、英語教育における文学教材の有用性について、具体的な作品例を挙げ詳述する。また、第三に、英語教育で

1) 群馬県立県民健康科学大学

2) 育英大学

文学作品を教材として活用する際の実践例や教授法および課題について考察する。そして、第四に、英語教師が英米文学および英語圏の文学の知識を持つことの重要性について述べる。

II 英語教育における文学作品の活用の変遷と意義

英語教育史研究の第一人者である江利川は、田中菊雄（1893-1975）¹⁾の回想から、明治の学徒は英語の原書で精神の渇きをいやし、西洋をモデルとした近代化の下では、立身栄達の通行手形は英語であり、英語力の指標は文学の原書が読めることであったことを引用し、明治の日本では、文学作品が西洋文化の伝達者としての役割を果たしていた（江利川、2008:74）と強調する。

1948年の「教科書用図書検定基準（案）」では、卒業時の到達目標の一つが「外国語の標準的な現代文学作品が読めること」であり、その年に発足した新制高校の最初の教科書である *The World through English* は文学重視で、シェークスピアが三篇もあった（江利川、2008:80）。その後、1952年版の指導要領では、教材の文学偏重に釘が刺され、1955年には、日本経営者団体連盟が「シェークスピアより使える英語」への転換を要望すると脱英米文学への政策誘導が加速し、高校用学習指導用要領の題材規定を見ると、1970年版ではすでに、小説、劇、史、随筆等の文学作品の規定が消えている（江利川、2008:81）。2003年3月に文科省が発表した「英語が使える日本人の育成のための行動計画」から「文学」という言葉が消え、その代わりに「コミュニケーション」という言葉が多用されている（江利川、2008:84）。このことから、日本の英語教育から文学が一掃されつつある英語教育の現状がうかがえる。

上記のような状況に対して、斎藤は「文学こそ最良の教材」というタイトルで開催された英語教育の対談の中で、「文学は最良の英語教育の教材」

であり、「我々が日常的に行っているコミュニケーションのかなりの部分が、過去の出来事に関する物語である」とし、「文学の言語」の重要性（斎藤、2004:6）について述べている。

英語教育における文学の重要性については、その他多くの研究者が言及している。例えば、田口（2015）は、文学作品の英語は実用的ではなく、コミュニケーション能力養成には役に立たないとみなされている背景に対して、文学教材はコミュニケーション能力養成に貢献できないはずは無いと反論し、中学校や高等学校などで使用されている O. Henry（1862-1910）の短編“After Twenty Years”を例として文学教材の意義と可能性について考察している（田口、2）。また、中学校英語教育における絵本や児童文学の活用について論じた白須（2004）は、英語で書かれた絵本や児童文学を通してリーディングの能力を養うことが、言語面でコミュニケーション能力の養成につながるだけでなく、異文化理解や人間の教育といった側面における波及効果の期待（白須、83-84）についても言及している。加えて、小中学校の英語教育で、絵本や児童文学が学習者のやる気を起こさせ、言語学習という観点では、文学が自然な言語、洗練された言語であること、物語の文脈の中で言語を理解していくということ、さらに、子供の情緒の発達を促し、人と人との関係や異文化を理解する上で必要な姿勢を育て、読者に内面的な変化をもたらすという利点があるという Ghosn（2002）の言及を取り上げ、英語教育における文学の重要性（白須、89）について述べている。

日本の英語教育における文学教材の可能性に関する研究について研鑽を積む高橋（2015）は、次のように述べつつ、その著書の中で多岐にわたる文学教材の活用方法を示している。コミュニケーション能力は言語の重要な機能であるため、コミュニケーション能力育成に主眼を置いた日本の英語教育の目標そのものに対する批判的立場はとらないとする。改善すべきは、コミュニケー

ション能力を養成するために選択された手段であり、日本の英語教育では、オーセンティックな教材の概念の狭い解釈により文学が排除される事態に陥った。文学は、英語によるコミュニケーション能力育成のためのオーセンティック教材として効果的であるとともに、より豊かなコミュニケーション能力を身に着けるために適した教材なのである（高橋、3）。

英語教育は長らく文学重視であった時代から、コミュニケーション能力養成を目的とすることへシフトし、訳読方式の英語講読から聞く、話す能力の向上を主目的とする教育へと移っていった。そのような変遷の中でも、文法、そして訳読の重要性に再度気づかされては、その狭間を何度も右往左往しているように思われる。

英学者である斎藤（2011）は、フランス学者である野崎との対談の中で、英語を逐次日本語に置き換えることが時間の無駄であり、英語で考え反応する力が重要だとする現在の英語教育の主流に反論し、日本語で育った人間が初めから英語で考えることが無理であること、言葉を一つ一つ置き換えるという知的訓練、つまり翻訳という技術の必要性（斎藤、108）を訴えている。さらに、役立つ英語という点を強調するのであれば、文学を読んでいくことこそ、むしろ日本語が鍛えられ、異文化を見る目が養われ、人間として豊かになっていくことにつながると、その有用性（斎藤、112）を強調している。

英語が言葉である以上、他者とコミュニケーションを取るための手段であることは疑いのないことであるが、コミュニケーションは単に他者と交わす言葉のみを示しているのではない。他者を理解しようとする態度を示し、状況に応じた対話をするからこそが良いコミュニケーションと言えるのであり、そこには他者に対する共感力が必要になる。そのためには、個人の限られた人間関係では体験しえない経験を疑似体験し、多様な人々の心の機微に触れる体験が必要であり、文学作品

のような多様な人々の心情が織りなす物語こそ、それらを可能にする手段になりえるのではないだろうか。

以上の点から、英語教師が英米文学に触れる機会をより多く持ち、それらに関する知識を深めていくことは、英語の多用な表現を学ぶという言語面のみならず、それが語られる場所や状況に応じてより適切なコミュニケーションを取るために必要な他者理解や異文化理解につながることであり、そしてそれを授業で生かしてくという点で意義のあることであると言える。

III 英語教育における文学作品の有用性

—マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』を例として—

1. コア・カリキュラムにおける「英語文学」の三つの学習項目について

文部科学省が示す中・高等学校教員養成課程の外国語（英語）のコア・カリキュラム²⁾における英語科に関する専門的事項の一つとして、「英語文学」が位置付けられている。そして、コア・カリキュラムが示す「英語文学」で扱うべき学習項目は、①「文学作品における英語表現」、②「文学作品から見る多様な文化」、③「英語で書かれた代表的な文学」の三項目である。さらに、英語教師は、「英語で書かれた代表的な文学について」および「文学作品において使用される様々な英語表現について」理解し、加えて「文学作品に描かれている、英語が使われている国や地域の文化についても理解」していることが到達目標として求められている。

『ハックルベリー・フィンの冒険』（*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884 以下 *Huckleberry*）という文学作品を例として、これら三つの項目に照らし合わせて考えると以下のように捉えることが可能ではないだろうか。

アメリカにおける代表的な文豪、マーク・トウェ

イン (Mark Twain, 1835-1910) によって書かれた『ハックルベリー・フィンの冒険』という「英語で書かれた代表的な文学」を教材として、文学作品が書かれた当時の英語を読むことによって、「文学作品における英語表現」を理解することができる。さらに、南北戦争前のミシシッピ川を背景に描かれた自然とそこに生きる自由を求めた少年たちの生き方や心情から他者を理解しようとする事、また、彼らの自由を阻む奴隷制度や人種差別など歴史的背景を理解することなど「文学作品から見る多様な文化」についての理解を深めることができるということである。

このように、英語教師は、一つの文学作品からも多様な英語表現や文化を学ぶことができることを認識し、さらにそのような学びへと導く可能性のある代表的な文学作品に関してより深い知識を持っていることによって、文学作品を多様な形で授業の中で生かすことが可能になると言えよう。

2. マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』について—作者と作品

前述の三つの項目を念頭に置き、マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876) と共にミシシッピ川3部作と言われる作品群の一つである『ハックルベリー・フィンの冒険』を例として、英語教育における文学作品の教材としての可能性に焦点をあて、その有用性について述べる。これらの作品は、小・中学生がほぼ同じ年齢の少年を主人公とした物語として多くの愛読者が想定され、また高校生も小・中学生のころに読んだ読み物として記憶に新しいものであることから、英語学習者にとって活用の可能性がより高い教材であると言える。

『ハックルベリー・フィンの冒険』は、作者マーク・トウェイン自身の経験に基づいたリアリズム小説であり、主人公とはほぼ同じ年代の学習者にとって、興味深い示唆を与えうる文学作品である。この作品の翻訳者である村岡は、あとがき

で、「アメリカ文学の真髄を示す大記録」と評し、「真実を語る迫力」が読者の心を打つのだ(村岡、414)と述べている。このことから、日本の英語教育で、教師が理解しているべき「英語で書かれた代表的な文学」であり、学習者にとっても学ぶに値する文学作品の一つであることは言うまでもない。

作者であるマーク・トウェインは本名をサミュエル・ロングホーン・クレメンズ (Samuel Langhorne Clemens) と言い、ミズーリ州フロリダに生まれる。4歳でミシシッピ川に面した小村ハンニバルに移り、18歳で放浪の旅に出る。1857年から1861年の南北戦争勃発の年までミシシッピ川を航行する蒸気船の操舵手となり、この四年間の船上での経験が後の文学の創作に不可欠な人間観察の絶好の場となる。特にマーク・トウェインは、多様な作品を書いているが、子供と社会との関わりを描く物語を得意とした(英語文学辞典、371)。

物語は、前作の『トム・ソーヤーの冒険』の結末でトム (Tom) と共に大金を手に入れた後、少年ハック (Huckleberryの愛称) が老姉妹、ダグラス未亡人 (Widow Douglas) とミス・ワトソン (Miss Watson) の養子として育てられるところから始まる。ハックの母はすでに亡くなっており、ハックは、アルコール中毒症の父親からは虐待を受け、家族というものからは縁遠い生活を送っていた。学校には行かなかったものの、賢く暢気な性格で、気軽な服装を着てパイプを吹かすのが好きな少年であった。一方、老姉妹はハックを小さな紳士に変えたいと考え、厳しく教育し始める。それにもかかわらず、ハックは、窮屈な生活を嫌い、自由を求め家から逃げ出し、逃亡先の無人のジャクソン島で自由を求めて逃げてきた黒人奴隷のジム (Jim) と出会うのである。二人は共にミシシッピ川を筏で下りながら、殺人、銃撃戦、詐欺など様々な事件に巻き込まれつつ冒険を重ねていく。逃亡奴隷は告発されるべき存在であったため、ハック

は、奴隷制度から逃げだしたジムを法務官に手渡すべきだと考えたものの、ある日、賞金を得るためにジムを捕まえようとしている男たちに出会った時、黒人奴隷のジムの優しさを思い出し、友情を優先しジムを救うことにするのである。

以下の引用は、Chapter 1の一部であるが、主人公ハックと、彼を養子にする姉妹との生活の一部を描いたくだりである。

After supper she got out her book and learned me about Moses and the Bulrushers, and I was in a sweat to find out all about him; but by-and-by she let it out that Moses had been dead a considerable long time; so then I didn't care no more about him, because I don't take no stock in dead people.

Pretty soon I wanted to smoke, and asked the widow to let me. But she wouldn't. She said it was a mean practice and wasn't clean, and I must try to not do it any more. That is just the way with some people. They get down on a thing when they don't know nothing about it. Here she was a-bothering about Moses, which was no kin to her, and no use to anybody, being gone, you see, yet finding a power of fault with me for doing a thing that had some good in it. And she took snuff, too; of course that was all right, because she done it herself.

(*Huckleberry*, 2008: 4)

夕食がすむと、未亡人は本を持ち出して来て、僕にモーゼと葦についておしえてくれるので、僕は一生けんめい、モーゼのことをすっかり知ろうとした。ところが、そのうちに、未亡人はモーゼがずっと昔に死んでしまったと口をすべらしたので、僕はもうモーゼなんかどうでもよくなった。死人なんぞに興味はないもの。

まもなく、僕は煙草が吸いたくなったので、吸っていいかと未亡人に訊いたら、許し

てくれなかった。そんなことは悪い行いだし不潔だから、二度と吸おうとしてはいけないと言った。これが一部の人たちのやり方なのだ。なにも知りもしないことに難癖をつけるのだ。未亡人ときたら、親戚でもない、死んだからにはだれの役にも立たないモーゼなどを大騒ぎする癖に、僕が少しはためになる点もある喫煙をしたいと言うとどえらく悪く言う。しかも、自分じゃ喫煙草をつかっているくせに。もちろん、それはいいのだ。自分のことだから。

(村岡花子訳 1959: 10-11)

上記の場面は、未亡人のダグラス夫人が、暢気で、学校へも行ったことないハックを紳士にすべく教育を施そうと、食後のテーブルで、ハックにモーゼの話聞かせている場面である。ハックに厳しく教育しようとしている姉妹の気持ちとは裏腹に、死んでしまったモーゼの話など興味がないと言わんばかりに、退屈そうにし、懸命に聖書を読み聞かせている未亡人の傍らで、やがてハックは煙草をふかしたいとさえ思うのである。

3. 『ハックルベリー・フィンの冒険』から学ぶ「英語表現」と「文化」

『ハックルベリー・フィンの冒険』が「英語で書かれた代表的な文学」であるということは前述したとおりである。次に、コア・カリキュラムが示す「英語文学」で扱うべき学習項目の他の二点、「文学作品における英語表現」「文学作品から見る多様な文化」について、上記で引用した物語の一部を使って考察する。

はじめに、‘I’や‘me’は、一体誰のことを示すのかと読者である学習者に問うことによって、上記の英文が一人称の語りで書かれた物語であることを気づかせる。そしてそれによって、読者である学習者は、主人公ハックの心情をより身近に感じることができ、彼の目線から見たアメリカ社会の

一端を理解することができることを認識する。

ここでは、先の第Ⅲ 1 節で述べたコア・カリキュラムの「英語文学」で扱う学習項目①～③について考えていく。まず、①「文学作品における英語表現」については、学習者は、上記の英文を通して、單元ごとに学んでいた基本的な英文法および多様な英語表現を物語の文脈を通してより深く理解し、アメリカに住む人々の生活の一端を描写した生きた表現に触れることができる。さらに、学習者は、授業で学んだ基本的な文法事項を文学作品の中から見出すことによって、短い原文の抜粋の中でさえも、学ぶべき基礎的な文法事項が満遍なく含まれていることに気づき、さらなる英語学習の興味へとつなげることができる。

大学英語教育においては、学習者は上記で示したように原文の文学教材を読むことを基本とするが、原作の英文の難易度によっては、学習者のレベルに合わせた活用が強いられることは否めない。原文を難しいと感じる学習者に対しては、リトールド (retold) 版の使用³⁾、あるいは適宜物語の筋を教師が補足説明をしていく等のサポートを取り入れながら活用していくことも可能であると考えられる。また、翻訳本や映画等を活用し、物語の大枠を理解した上で英文を読み進めていくといった母語を併用することも一つの選択肢として考えられるであろう。加えて、中学・高校生を対象とした英語教育では、英語に対する興味・関心および英語の教育期間による相違から、授業で一般的に文学教材を活用する場合は、慎重かつ綿密な授業計画が不可欠であろう。英語教育における文学教材の実践および課題については、次の節で詳述する。

コア・カリキュラムの学習項目②「文学作品から見る多様な文化」については、ここでは文化を二つのポイント(1) 文学作品に登場する人々の心情を読み取ることによって、多様な人々の生き方や考え方に触れるという他者理解⁴⁾および(2) 文学作品の背後にある歴史や文化と捉えることとする。

まず、一つ目のポイントである、登場人物の生き方や心情から他者理解へとつなげていくという文学作品の意義から見てみよう。ダグラス夫人は、ハックを礼儀正しい紳士にするために、旧約聖書に登場するモーセについて学ばせようとする。

1611年の欽定訳聖書 (*The Authorized Version of the Bible*) の多くの家庭への普及により、欽定訳聖書を愛読するピューリタンは、その原罪観から、子どもの宗教教育を焦眉の急と感じ、神への導きをテーマとする子どもの本が誕生する。このように、17世紀までの子どもの文学は、夭折する子どもたちを地獄の非業火から救い、無事に天国に送ることを目指すピューリタンらの宗教教育の手段であった (英米児童文学史、59)。このことから、大人たちは子どもに天国に行けるよう礼儀正しい生活を送るべく聖書を学ばせ、キリスト教の信仰心を植え付けようとしたことがわかる。

ハックは紳士にしようと躍起になるダグラス夫人の意に反して、既に存在しないモーゼには関心がないと言い放ち、より自由で自分らしく生きられる生活を望むのである。その後、未亡人の妹ワトソンがハックに天国や地獄について詳しく説明をするくだりでは、ダグラス夫人とワトソンは、死後天国へ行けるような生き方をするために深い信仰心を持ち聖書を学び正しい生き方をする人々として描かれている。それに対して、ハックは、そのような生き方は目指さないと心の中で誓い、聖書や信仰には興味を示さず、むしろ、地獄に行きたいとさえ言って、ワトソンを怒らせるのである。しかし、その後ハックにも恐怖と不安から逃れるために、胸に十字を切って、悪魔に対抗しようとする人間らしい弱さを見せる場面がある。自分の肩に這い上がってきた蜘蛛を指で弾き飛ばしたら、ローソクの中に落ちてしまい瞬く間に燃え縮んでしまったのである。その蜘蛛の死を目の当たりにしたハックは、恐ろしく不吉な前兆を感じ不安と恐怖で身震いしてしまうのである。

ハックは、ジェームズ・ジェインウェイ (James

Janeway, 1736?-74)⁵⁾ が示した二種類の子どものうち、聖書には目もくれず、嘘をついたり、遊びに夢中になったりする子ども（英米児童文学史、61）に相当する、ピューリタンのには悪い子どもの典型として描かれている。その一方で、虫の死に対しては、神の助けを求めようとする人間らしい弱さや黒人奴隷のジムと友好を結ぶという差別のないハックの優しい心を読み解くこともできるのである。

アラン・エリス（Allan B. Ellis）とアンドレ・ファヴァット（F. Andre Favat）は、『ハックルベリー・フィンの冒険』の語彙をコンピューターによって検証し、「家族」「死」という二つの概念が最も頻繁に登場するという結果を導き出した（グリスウォルド、52-53）。これは、母の死と父からの育児放棄によって孤児になったという事実により、ハックの心の中に家族に対する嫌悪感とともに憧れという相反する気持ちが同居していることを示唆しているのではないだろうか。そのような、時には相反する感情が交差する複雑な人間の心情についての気づきも文学作品を読むことの意義であると言える。

次に、二つ目のポイントである、文学作品の背後にある歴史や文化についてである。まず、文化的背景の一つとして、聖書およびキリスト教、さらには子どもと成長という観点から考察してみよう。

ダグラス夫人は、ハックにモーゼと葦の話聞かせるが、これは、旧約聖書「出エジプト記」に登場するモーゼが自身と同じイスラエル人をエジプトから脱出させるために海を二つに分け逃亡を助けた場面が有名な物語である。モーゼと葦とは、エジプト王が奴隷の民であるイスラエル人の反乱を恐れ、当時男の子が生まれたらナイル川に流すように命じられていたことから、モーゼの母親は、しばらく彼の誕生を隠した後、パピルスの籠にモーゼをくるみナイル川の葦の間に置いていった（武田、164-165）というエピソードによるも

のである。聖書に親しむことを強要している姿からは、ダグラス夫人が、子どもを立派な紳士にするために聖書を読み理解しておくことが必要であると考えていること、また、19世紀のアメリカでは、イギリス同様、聖書を学び信仰心を持つことが良い人生を送るための指針になっていたことが理解できる。

さらに重要なことは、聖書に親しむという文化的背景に加え、モーゼが自分と同じ民族のイスラエル人を奴隷として働かせていたエジプトから脱出させようと試みる点が、ハックが黒人の奴隷制度の下で自由のないジムと一緒に川を下るという点に類似していることである。川に流される幼少のモーゼの姿は、親の虐待から逃れて川を下るハックの姿に重なり、奴隷の民を開放するように、ハックは黒人奴隷のジムを開放する役割を担っている（武田、165）のである。

一方、ハックがジムと共にミシシッピ川を筏で下っていく旅を心の成長の旅と捉えることも可能であろう。地獄に落ちても構わないとさえ考えるほどに、黒人奴隷のジムを救おうとする友情の物語と捉えることも可能であるが、この旅に出ることで、アメリカ南部の社会・文化を背後に置いてきた、つまり、旅によって、社会の慣習や文化という汚れを捨てて、人間本来の無垢の状態に戻ったのだ（青木、140-141）とも考えられる。川の水による浄化ということであろうか。ハックの物語を少年の成長物語と捉えることが可能であるとともに、むしろ無垢な少年に戻った成長しないハックという別の見方もできるのである。

このように、西欧におけるキリスト教の文化に対する理解とともに、物語に描写された川の象徴的意味にまで思考をめぐらすことによって、物語はさらに深い意味を持つ。文学研究とまでいかなくとも、物語が人の生き方を描いている限り、教師は、学習者に物語に描かれる象徴的な意味に対する気づき、発見を見出せるように導くことも重要なのではないだろうか。同時に、上述したハッ

クの成長であるとともに成長しない無垢なハックというように相矛盾する考え方も可能なように、解答のない物語の解釈—ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)⁶⁾ を学習者に促すことは、英語学習に加え、これからの様々な学びにおいて必要であることを示していくことも教師の役割の一つであると言える。

『ハックルベリー・フィンの冒険』は、出版後、ハックの粗暴な言葉使いを理由に青少年が読む図書としてはふさわしくないとして、図書館や教室から追放されてきた。この事実から、アメリカにおいて、ハックのような自由奔放な子どもの姿に対して、多くの大人が寛容ではなかったことがうかがえる。子どもは大人に対して従順で、人種差別に対しても明確に理解するように教育されていたのかもしれない。このように、当時のアメリカにおいて、子どもがどのように扱われていたのか、さらには大人にとっての子ども観について考える機会にもなりえよう。

次に、歴史的背景の一つとして、物語の中でしばしば登場する煙草という嗜好品の存在があげられる。これは、当時のアメリカ社会における煙草文化、その歴史や生活における受容などについて学ぶ機会となる。物語の中で、ハックは、ダグラス夫人の立派な紳士になってほしいという気持ちとは裏腹に、夫人からのモーゼと葦の話の話を聞いている最中に煙草を吸いたいと懇願する。しかし、ダグラス夫人自身は煙草を吸うのにもかかわらず、ハックに対しては煙草を吸う行為は悪い行いだとして、許さないのである。

JTたばこの歴史によると、17世紀初頭にイギリス領のバージニア植民地で栽培が始まった煙草は、17世紀末には、イギリス全土はもとより、その植民地の需要に応えられるほどの産業へと発展する。独立戦争後の18世紀末になると、アメリカは葉たばこの世界供給国となり、パイプ煙草から嗅ぎ煙草へと移行する。しかし、19世紀後半に起こったアメリカの内戦である南北戦争を機に、ヨーロッパからのマッチの登場により、人々の意識が再び「パ

イプたばこ」へ移っていったという。ハックが、‘I wanted to smoke.’と述べているのに対して、ダグラス夫人の場合は、‘She took snuff, too.’と表現されていることから、ダグラス夫人は葉タバコ (smoke) ではなく嗅ぎ煙草 (snuff) を好んでいたことがわかる。パイプ煙草を片手に木の下で煙草をくゆらすハックの様子からも、ダグラス夫人が嗅ぎ煙草を嗜好していた時代から、ハックのような若い少年が吸うパイプ煙草へと移るアメリカにおける煙草の変遷について知ることができる。同時に、煙草の栽培には多くの黒人奴隷が欠かせなかったことへの認識を促すことによって、黒人奴隷のジムの置かれた環境や心理解へつなげることも可能である。

ヘミングウェイ (Ernest M. Hemingway, 1899-1961) が、「すべての現代アメリカ文学はこの1冊の本に由来する」と評したように、『ハックルベリー・フィンの冒険』には、アメリカのミシシッピ川という雄大な川を背景に描かれた自然と文明の対立、奴隷制度と人種差別、自由を求めて探求する少年の成長が描かれている (英語文学事典、372)。

以上のことから、ハックの物語を読むことによって、19世紀南北戦争が始まる前のアメリカの奴隷制度を含むアメリカの歴史や文化に対する理解に加え、当時の奴隷制度に翻弄された黒人奴隷の少年と心を通わせる白人ハックとの差別のない自由な生き方とともに人間同士の心の通い合いの尊さを学習者は学ぶことができると言えよう。

IV 英語教育における文学作品の活用の実践および課題

この節では、英語教育において文学教材を活用する場合の実践方法や課題について、先行研究を踏まえて考察したい。英語教員養成過程では、学習者は、将来中学・高校生に英語を教える立場として、より高度な英語力を修得することは不可欠である。その中でも、コア・カリキュラムにおける専門的事項として「英語文学」が提示されているのは、英語教師

が、授業において学習者の英語の総合的な力を向上させるための一助として文学作品の活用があるということである。すなわち、教師自身が英語で書かれた文学作品に対する知識が必要であり、それを活用した多様な教授法を修得する必要があることを示唆している。

しかし、教育現場で文学作品を教材とする授業は、敬遠される傾向であることは依然として変わりが無い。かつて、文学作品を読むことが英語を学ぶことと同等であった時代に比べ、現在の英語教育では文学を教材とした教科書が減少しているだけでなく、実用性や即戦力が要求される現代では扱いにくい教材と見なされている。文学が英語教育で敬遠されがちな教材になってしまうことの原因には、文学テキストが実用的ではないという点でオーセンティックではないという誤解があり、加えて、文学は読み物であり、教室内での活動が文法訳読法に限られてしまうという先入観がある(久世、2023:64)。しかし、文学教材が英語教育における実用主義やオーラルコミュニケーション重視という流れの中で衰退しつつあるのは世界的な傾向であり、日本に限ったことではない。そのような中で、1980年前後に英語教育における文学教材の再評価および外国文化を学ぶためのオーセンティックな教材としての文学の価値(Kramsch & Kramsch, 2000)が指摘された(久世、2011:63-4)ことは注目に値する。遅れること2000年代前半に日本でも文学教材の再評価が行われ、その後、教室内での文学を教材とする授業の多用な実践研究が行われるようになった。以下、文学教材の実践例を提示しつつ、可能性のある活用方法について、その効果と課題について考察したい。

中学および高等学校の英語教育での文学教材に関するワークショップを行った高橋(2015)は、現職の教員や将来教員を目指す学生らが考える利点と欠点についてまとめた。その結果によると、文学教材の欠点として、教員の負担、学生に興味

を持たせることの困難さ、文学作品中の単語や表現の難しさ、文学作品を使ったアクティビティの問題等が挙げられたと言う。一方、利点としては、豊かな表現、背景知識の改善、学習者の人生に及ぼす良い影響、読む楽しみをあげており、文学教材の優れた点に理解を示しながらもためらいを感じている状況が示された。このことから、文学教材の利点を優位にするためにも、現場での実践的な文学教材の導入に対する解決策を模索する意義は十分ある(高橋、246-252)と言える。

久世(2023)は、文法訳読法にも一定の役割があるとした上で、教材と教授法の関係を固定するのではなく、授業の目的や使う文学テキストにより教授法やアクティビティを柔軟に変えていくことにより、文学教材による多様な授業方法は可能である(久世、64-5)としている。例えば、授業最後の5分間で使える英文学教材を用意し、徐々に取り入れていく方法や、中学・高校の英語教育で文学教材を取り入れる例として、バスカーリア(Leo Busbaglia)の『葉っぱのフレディ』(*The Fall of Freddie the Leaf*, 1982)を活用例とした指導案を示している(高橋2015:252-260)。

また、久世(2019)は、大学の英語教育で、ヤングアダルトの洋書を読み進めていく活動を行った。4人グループで、メンバー各自にタスクが与えられ、課題を通して内容を理解していくものである。グループディスカッションを行うことで学習者は楽しく取り組めたことや、洋書を読み終えたという達成感があったという感想を述べていたと報告している。加えて、文学とその翻案である映画を併用することが、文学作品のプロットの把握の補助的役割を果たし、さらに、オーラルおよびリスニング活動の可能性があると(久世、2023:68)についても指摘している。

このように、学習者に馴染みのある受け入れられやすい教材を学習者のレベルを考慮しつつ、教師による一方的な授業にならないように、無理なく徐々に取り入れていくこと、また、原文を使

う場合は、表現が比較的易しく文章の短い絵本の活用、映画などの視聴覚教材の併用など、学習者の英語力や興味に合わせて作品や教授法を選択することが必要である。加えて、文学という特徴から内容と言語の学びを同等に組み入れた多様なアクティビティを取り入れる CLIL⁷⁾、グループで文学作品の内容を把握するための担当を決めて読み進めていく Literature Circles⁸⁾ 等多様な教授法を、学習者に合わせて選択し指導していく力量も、英語教師には試されているのかもしれない。

再評価されつつあるとはいえ、教室内での時間的制約や英語教育に割り当てられた時間数等を考慮すれば、時間的余裕が必要である文学教材の活用の充実に向けての解決は困難な点が多いことは否めない。英語の4技能において、文学教材は読解力の向上としての役割が大きく、文学作品を原文で読むことによって、達成感が得られ、読解力向上に一翼を担うことは確かである。しかし、英語の授業においては時間的制約があるため、十分な時間を取り文学教材を最大限に活かした指導をするには限界がある。そのため、最終目標としては、教師がいなくても自ら学べる英語学習者、つまり自立した英語の読み手 (independent reader) になるように、これまで紹介した文学教材を活用した教授法を学習者の特性に合わせて選択し、学習者にとっての有意義な英語と向き合う時間を作り出すことが英語教師の重要な役割であると考えられる。

文学教材の活用には高い壁がある昨今の教育現場で、英語教師は、Carter & Long (1991) が提示したように、文学を活用するための3つのモデルとしての「言語」「情意と人間形成」「文化」に教育としての重要な要素が含まれているということ、そして英語教育において文学教材の有意義な価値があるということを信念として持ち続け、授業の目的と学習者の興味・関心等を踏まえたより適切な教材と教授法の選択に柔軟に対応していくことが重要である。

V 英語教師として英米文学の知識をもっていることの重要性

本節では、文学についての知識が、英語教育において英語教師が持つべき資質の一つとして重要な要素であることを示していきたい。大学の授業において文学作品を題材とした教科書を扱う場合、必ずと言ってよいほどディズニー映画となったアダプテーション作品が散見される。それらの文学作品について、作者は誰であるのか問う質問を学生に促すと、多くが正しい作者を述べることができず、ウォルト・ディズニー (Walt Disney, 1901-1966) と答える。例えば、『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) は、ディズニーのキャラクターが先行し、物語の内容よりもキャラクターグッズが有名になっている一例であるが、オックスフォード大学の数学教師ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) が大学の寮長の娘アリス (Alice Liddell) にせがまれて書いた物語である。『くまのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*, 1926) は劇作家であり詩人でもあったミルン (A. A. Milne, 1882-1956) が息子のために息子クリストファーと彼のおもちゃのくまを主人公にして書いたものである。『ピーター・パン』(*Peter Pan and Wendy*, 1911) は、劇作家のバリー (J. M. Barrie, 1860-1937) が戯曲として書いた *Peter Pan* を物語化したものである。これだけでも、ディズニーの映画作品の多くが英米文学作品に基づいて製作されているという事実を目の当たりにするであろう。

英米の文学作品から端を発した産物は、映画作品だけでなく、そこからヒントを得たキャラクターや店の名前など多岐にわたる。具体例を示すと、『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass, and What Alice Found There*, 1871) に登場する卵のキャラクター、ハンプティ・ダンプティ (Humpty Dumpty) は雑貨店の名前になっている。また、『ハックルベリー・フィンの冒険』の主人

公であり、ジムと釣りをするハックルベリーにちなんで『タックルベリー』という名前の釣具店がある(高橋、2015:135-137)。これらを例として挙げた高橋(2015)は、文学作品の知識なしにはそのユーモアや創造性を理解することが困難である(高橋、144)と述べ、文学作品の知識の重要性を強調する。さらに、19歳という若さにして人間のおぞましく醜い一面を描いたメアリー・シェリー(Mary Shelley,1797-1851)のゴシック小説『フランケンシュタイン』(*Frankenstein: or The Modern Prometheus*, 1818)の中で、理想の人間を求めて、複数の死体を組み合わせて作った人間らしき怪物を産み出した博士の名前はフランケンシュタインであるが、多くの学生は怪物の名前であると勘違いしている。現代の遺伝子操作による理想的な子供、デザイナー・ベイビー(*designer baby*)を産み出すことに潜む危うさを説明する際に引き合いに出される例¹⁰⁾にもあるように、科学的な論文やスピーチなどにおいても、文学の知識次第で、理解の深さも変わり得るのである。

英語教師として必要な英米文学としての教養は、英語を学ぶ上でそれを取り巻く異国やそこに住む人々に対する理解を深めるために必要であることは言うまでもない。それは、英語教育は、英語という外国語のコミュニケーションとしての言語習得が第一の目的であるが、それに加えて、文学作品を通して英語を学ぶことによって、異国の人々や文化の理解を深め、物語を通じて人々の感情に共感し、他者理解を深める契機になるからである。高橋(2004)は、文学作品が読み終えた後により深い影響力を持つ、魅力満載の世界であり、このような文学に英語で触れることによって日常生活がいかに豊かになるかということ伝えるためにも、まずは教える側の教師が見直し、文学の価値を見出すことが必要である(高橋、37)と述べる。また、英学者齊藤(2011)は、語学の延長線上に文学の豊かな世界があるということ、我々の責任で言い続けなければいけないし、

言い続けることによって文学は死なないと確信している(齊藤、113)と述べている。

このような英語教育者の言及からも、英語教師は、言葉と文学の結びつきを改めて認識するとともに、すぐに役に立つあるいは結果が見えやすいことに飛びつくのではなく、ゆっくり考え深い思考の世界に身をおく時間を持つことが、教師自身が担当することになる学習者の有意義な学び、ひいては心豊かな人間性へつながるということを認識する必要があるのではないだろうか。

VI おわりに

本論では、英米および英語圏の英語で書かれた文学作品は、英語教師が授業用の教材として活用する英語の一つの選択肢として考え、コア・カリキュラムの「英語文学」で扱うべき三つの学習項目「文学作品における英語表現」「文学作品から見る多様な文化」「英語で書かれた代表的な文学」について、具体的な作品を例として説明した。

英語教育で文学教材を活用する場合は、リーディング教材としての意義が大きいと考えられる。しかし、文学作品は、その内容を理解するために必要な文法および英語表現の知識が必要になると同時に、文学教材を活用したリーディング活動を継続することにより、文法に関する知識および語彙力の向上が期待されるとも言える。英語教師は、文学作品の内容および語彙の難易度により、学習者に適した文学作品の選択も加味しつつ、多様な教授法を駆使し、自立した英語の学習者へと導く役割を認識する必要がある。

そのため、英語教師にとって、英語で書かれた文学の歴史的な背景や主要な文学作品についての知識や素養は、授業で文学作品を教材として活用するなど様々な場面で生かされうる不可欠な要素であると言える。従って、英語教師として文学を学ぶことには大きな意義があることを再度強調したい。文学作品は、全体を通して、英語を学ぶ学

習者にとって興味深い示唆を与えるヒントで満ち溢れている。今後は、そのヒントに気づく素養と十分な英語文学の知識を持ち合わせ、「英語という外国語を通して、学習者を未知の世界に誘い、心を豊かにし、人間を育む」(鳥飼、2018:212)教育を目指せる教師の養成に尽力したい。

【註】

- 1) 田中菊雄(1893-1975)は、英語を独学で学び、小学校の教員から、中学校、高校の教員を経て、最後は神奈川教授を歴任した。『岩波英和』の執筆が人生最大の修業となり、「本辞書編纂に就いて」において、いわゆる実用主義がそもそも百害の根源なのである、として英語教育の風潮を批判した(江利川、2023:72-77)。
- 2) 外国語(英語)コア・カリキュラムについて(文部科学省)
<https://www.mext.go.jp/content/20230821-mxt_kyoikujinzai01-000031486_2.pdf>
- 3) リトールド版の使用については、原書を活用する場合との相違について高橋(2024)が言及している。コア・カリキュラムの学修項目「文学作品における英語表現」が説明するように、教職課程の「英語文学」の授業で履修者の読解力を向上させたり、多様な表現を学んだりすることを目指すのであれば原文購読が必要である。それによって、原文を通して作品の背景を含めた理解が深まり、教科書掲載のリトールド版と原書の比較を通して語彙や表現の相違とその効果について検討することができるからである(高橋、10)。
- 4) 「他者理解」についての鳥飼(2018)の言及に賛同するとともに、本論では広義の意味としての「他者理解」という表現を使うこととする。鳥飼の言及を要約すると次のようになるだろう。他者の立場に身を置いたつもりで、他者になりきり、その気持ちを理解することとは理想ではあるが、非現実的な達成目標かもしれない。異文化について、その違いがあることに気づかせ、はっきりしない部分を許し、寛容になることで接触を閉じずに、相手を知ろうとする好奇心に転換する。こうした気づきが相互理解への一歩となる。偏見を持たず容認する度量があることが「寛容性」であり、これは異文化能力の重要な要素である(鳥飼、180-182)。
- 5) ジェイムズ・ジェインウェイ(James Janeway, 1736?-74)は、ピューリタンの子供のための本、『子どものための形見』(*A Token for Children*, 1671-72)を書いた。子どもに対し、人間は生まれながらにして罪に穢れた

ものであるから、改心して神の慈悲と恩寵を乞わなければ、死後は悪魔とともに地獄の劫火に焼かれると警告した。神に祈り、心から魂の救いを願うことによって救われた子供は、死後天国で神に抱かれ、永遠の幸福を得ることができると伝えた(英米児童文学史、60)。ジェイン・ウェイは子供を、目上の教えに従順で、常に信仰が深い子供と、聖書などには目もくれず、神の名をいたずらに口にしたりうそをついたり、遊びに夢中になる子どもの二種類に分類した(英米児童文学史、61)。

- 6) ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)とは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不正確さや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」を意味する(帯木、3)。この言葉は、イギリス・ロマン派の詩人ジョン・キーツ(John Keat, 1795-1821)が初めに記述し、その後170年後に精神科医のピオン(Wilfred Ruprecht Bion, 1897-1979)が新たに言及した(帯木、37)。ネガティブ・ケイパビリティの有益さは、文学・芸術の領域を超えて、精神医学の分野にも拡大され(帯木、38)、解決しなくても持ちこたえていく、消極的に見ても実際には大きなパワーとなるこの能力は、すぐに解決できない問題も多い学校現場でも必要とされている(帯木、200-201)。
- 7) CLILは、Content and Language Integrated Learningの略称で、言葉の学習と科目内容の学習を組み合わせた教授法である。その組み合わせには限りがなく、言葉の学習に対するアプローチが学習者に同時に提供される点が重要である。つまり、CLILアプローチには言語学習で欠けがちな学習者自身の学ぶ意欲を引き出す可能性がある(笹島、10-11)としている。
- 8) Literature Circlesは、シカゴのDanielsを中心とするグループが開発した(Daniels, 2002)、学習者が本についてグループで語り合うための読書指導法である。1990年代に提唱されて以来、アメリカの小中学校の英語の授業で広く普及され、日本でも小中学校の国語科の授業(L1)において活用されており、大学生レベルのL2の授業に適用する試みも報告されている(新居、122)。その一つに、新居(2014)の大学生を対象としたLiterature Circlesを活用したリーディング授業の実践報告がある。ハーバード大学教育学部のPamela Mason氏は、Literature Circleについて、新しくはないが、依然として人気があり、読んだ本について学習者に考えさせ、小規模なグループ内で話をさせるという取り組みであると説明している。教師主導の授

業を避け、学習者が読んでいる作品が自分のバックグラウンドや興味を反映しているかどうか考えることも重要である。また、例えば、高校生に子供の時に読んだ好きな絵本を持ってきてもらい批判的に考えるように促すなど、必ずしも挑戦的な取り組みは必要ではない。この取り組みは元来L1の学習者に適用されているものであるが、Jeng-yih Tim Hsuは、L2の教員であるNelson (1984) がL2学習者も同様に、literature circleのような教師不在で学習者主導の小規模なグループディスカッションから恩恵を受けている(Nelson, 8) と指摘していることを取り上げ、台湾においても英語能力が多様であるL2の学習者がグループ内で協力して、読解の問題に取り組む手助けになるとして、この取り組みが適応可能である(Hsu, 6) と述べる。

- 9) ポール・ノフラー (Paul Knoepfler) は、2017年TED Talkにおいて、‘The ethical dilemma of designer babies’ というタイトルでプレゼンテーションを行った。その中で、遺伝子操作によってデザインされた親にとっての理想の子ども (デザイナー・ベイビー) を誕生させることの危険性を示すための例として、フランケンシュタインを引き合いに出した。<https://www.ted.com/talks/paul_knoepfler_the_ethical_dilemma_of_designer_babies?subtitle=en>

【引用・参考文献】

- Carter, R. and Long, M. (1991) *Teaching Literature*, London: Longman.
- Daniels, H. (2002) *Literature circles: Voice and choice in book clubs and reading groups*. 2nd Ed. Portland, ME: Stenhouse Publisher. [新居明子 (2014) 「Literature Circlesを活用したリーディング授業－学習者主体のグループワーク活動－」 関東甲信越英語教育学会誌 (28) : 121-134.]
- Ellis, Allan B. and Favat, F. Andre. (1966) “From Computer to Criticism: An Application of Automatic Content Analysis to the Study of Literature.” *The General Inquirer*, ed. Stone, Philip J. et al. Cambridge, Mass.: MIT Press, 628-38. [Griswold, Jerry. (1992) *Audacious Kids: Coming of Age in America’s Classic Children’s Books*. New York: Oxford University Press.]
- Ghosn, I. K. (2002) Four Good Reasons to Use Literature in Primary School ELT. *ELT Journal*. 56 (2) : 172-179. [白須康子 (2004) 「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」 人文研究：神奈川大学人文学会誌 154 : 83-111.]

- Griswold, Jerry. (1992) *Audacious Kids: Coming of Age in America’s Classic Children’s Books*. New York: Oxford University Press. [ジェリー・グリスウォルド著 遠藤育枝・廣岡糸子・吉田純子訳 (1995) 『家なき子の物語 アメリカ古典児童文学にみる子どもの成長』 阿吽社]
- Hsu, Jeng-yih Tim. (2004) Reading without Teachers: Literature Circles in an EFL Classroom. (*Online Submission*, Paper presented at the Cross-Strait Conference on English Education) <<https://eric.ed.gov/?id=ED492558>>
- Kramsch, Claire, and Oliver Kramsch. (2000) The Avatars of Literature in Language Study. *The Modern Language Journal* 84 (4) : 553-573. [久世恭子 (2011) 「文学教材を用いた授業－大学の英語教育における事例研究－」 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学9 : 63-79.]
- Nelson, G. (1984) Reading: A student-centered approach. *English Teaching Forum*, 2-5, 8. [Hsu, Jeng-yih Tim. (2004) Reading without Teachers: Literature Circles in an EFL Classroom.]
- Twain, Mark. (2008) *Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Oxford University Press.
- 青木由紀子 (2009) 『七つのテーマから読み解く英米児童文学』 ミネルヴァ書房
- 新居明子 (2014) 「Literature Circlesを活用したリーディング授業－学習者主体のグループワーク活動－」 関東甲信越英語教育学会誌 (28) : 121-134.
- 江利川春雄 (2008) 『日本人は英語をどう学んできたか 英語教育の社会文化史』 研究社
- 江利川春雄 (2023) 『英語と日本人－挫折と希望の二〇〇年』 ちくま新書
- 外国語 (英語) コア・カリキュラムについて (文部科学省) <https://www.mext.go.jp/content/20230821-mxt_kyoikujinzai01-000031486_2.pdf>
- 木下卓・窪田憲子・高田賢一 他編著 (2007) 『英語文学辞典』 ミネルヴァ書房
- 久世恭子 (2011) 「文学教材を用いた授業－大学の英語教育における事例研究－」 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学9 : 63-79.
- 久世恭子 (2023) 「大学英語教育における文学教材利用の意義・課題・実践」 岡山文学会 *Percica* 50 : 63-74.
- 齊藤兆史・野崎歆 (2011) 『対談 追い詰められた文学部と教養課程 語学の先にある豊かな世界を伝えたい』 中央公論11月号 中央公論社 104-113.
- 齊藤兆史・室井美稚子・中村哲子・海木幸登 (2004) [座談会] 文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活か

- すか？ <特集-I>英語教育に文学を！英語教育 10月増刊号 (53) No.8 大修館 6-14.
- 笹島茂 編著 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業』 三修社
- 白須康子 (2004) 「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」 人文研究：神奈川県大学人文学会誌 154：83-111.
- JT たばこの歴史 <https://www.jti.co.jp/tobacco/knowledge/society/history/world/04_1.html>
- 瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫 (1971) 『英米児童文学史』 研究社
- 高橋和子 (2004) 「<高・大>これまで使ってみた・これなら使える文学教材」 <特集-I>英語教育に文学を！英語教育10月増刊号 (53) No.8 大修館 34-37.
- 高橋和子 (2015) シリーズ言語学と言語教育【第34巻】『日本の英語教育における文学教材の可能性』 ひつじ書房
- 高橋和子 (2024) 「中学校英語検定教科書における文学教材と教職課程「英語文学」の授業」 明星大学大学院教育学研究科年報 9：1-19.
- 田口誠一 (2015) 「英語教育における文学教材の意義について」 尚綱大学研究紀要 人文・社会科学編 (47)：1-4.
- 武田貴子 (1992) 「5『ハックルベリー・フィンの冒険』プロパティからの解放」 pp.161-175. (岩山太次郎 別府恵子 『川のアメリカ文学』 南雲堂)
- 鳥飼玖美子 (2018) 『英語教育の危機』 ちくま新書
- 帯木蓬生 (2017) 『ネガティヴ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』 朝日新聞出版
- マーク・トウェイン著 村岡花子訳 (1959) 『ハックルベリー・フィンの冒険』 新潮文庫

(2025年1月4日受理)